佳作

# 誰かを支えられる人に

岩手県盛岡市立仙北中学校
３年　西條　奈知子

「バカやろう！」この言葉が何十年後かの私に響いていないことを願います。自分の大好きな物に囲まれた部屋で、幸せに暮らしているはずですから。

中学校３年の夏、私は大きな悩みを抱えています。それは「夢が見つからない」ということ。しかし、前に進むきっかけとなった出来事があるので、ここに書きとめておこうと思います。

夢といっても「将来あんなおうちに住みたい」とか「大好きなアイドルのライブに行きたい」とか、そういったことはたくさん思いつくのです。しかし、肝心な「この仕事をしたい」とか「そのためにこの大学に入りたい」とか「この高校で学びたい」とか、いわゆる“進路”というやつが全く見えないのです。しかし、そんな私の悩みなど露知らず、祖母もいとこも、久しぶりに再会したおじもおばも、親戚で行きつけのお店で働いている美容師さんでさえ「受験生だね。高校、どうするの？」と聞いてくるのだから、困ります。「ああ、今、その答えを堂々と、強い意志をもって言えたなら……」と考えたことは数知れず。自分にもどかしさを感じて、進路なんてどうでも良いと思ったこともあります。母はそんな私を見て「どうする？　高校に行かないで就職する？」とつぶやいていたこともあるので、それだけ私を心配していたのでしょう。

お盆にさしかかっていたある日、朝目覚めた私は、自分のほおが濡れていることに気づきました。夢をみていたのです。それは、数年前に亡くなった、祖父の夢でした。私は祖父が大好きでした。私の話をいつも笑ってきいてくれました。わがままもきいてくれたし、どんな時でも優しくて、公園、遊園地、動物園、いろいろな場所に連れて行ってくれました。でも、夢に現れたのは、覚えている限り初めてだと思います。それは、これといった特別な夢ではありませんでした。夢の中で突然現れた祖父は、テーマパークで遊んでいた私に「ついておいで」というように手招きしました。そして私に、私の大好きなスタジオジブリの展覧会か何かの限定チケットを見せました。その後、受付で前売券を入場券に換えて私に手渡すと、状況に理解が追いつかずにいる私が口を開く前に消えてしまいました。それだけです。それだけなのに、早起きが苦手な私は珍しく早く目が覚めて、なぜか分からない涙を１時間ほど流しました。走馬灯のように祖父との思い出がかけめぐり、私は当たり前のことに気がつきました。それは「私は一人ではない」ということ。本当に些細なことです。しかし、

それは不思議なほどに、私に心地良い安心感を与えました。
　そしてもう一つ、当たり前のことに気がつきました。私の大好きなアイドルグループのメンバーの一人が出演しているテレビ番組を見たときでした。彼が自分の過去について語る、トーク番組でした。そこで彼は、私の思いもよらないことを語りました。
「昔は夢も目標もなかった。アイドルなんて嫌だったし、なんなら、なりたくない職業のうちの一つだった。」
　彼が最初、アイドルという仕事に乗り気ではなかったことは知っていました。しかし、夢も目標もなくて私と同じように悩んでいたことは知りませんでした。今のキラキラした眩しすぎる笑顔からは考えられませんでした。「皆がみんな、明確な夢を持っているわけではない」それを彼に気づかせてもらいました。これもまた、些細なことです。しかしそれは、焦らなくても大丈夫だと私に勇気を届けてくれました。
　この二つのことに気がついてから、まずはがむしゃらに勉強してみようと決心しました。それが無知な私の世界を広げる、唯一の方法だと思ったからです。そうすればそのうちきっと、夢を見つけられると思ったからです。相変わらず悩みは悩みのままで、進学したい高校もはっきりとは決められていません。ですが、心の中を覆っていた「もや」はだいぶ消えて、気持ちも軽くなりました。
　そして今回、自分では分かっている、見えていると思っていても、案外気がついていないこともあると感じました。それに気づかせてくれた、人との関わりは尊いものだと改めて学びました。
　私は今までずっと、誰かに支えられて生きてきました。今度は私が、誰かを支えられるような、誰かに必要としてもらえるような人になります。そして、世界が抱えているあらゆる問題から目をそらさず、自分の未来を自分の手で創り出します。いつか周りに誇れるような私になることを目指し、精いっぱい頑張るので、しっかり見届けてください。10 年後の私にそう伝えたいです。